母が教えてくれたこと

三月の面会室。
アクリル板越しに見た母の診断書には、
「余命一か月」とあった。
日頃から咳こんで苦しそうにしていた母だったが、僕には肺炎だといっていた。でも、実際には違った。
「肺にガンが見つかった。もう脳や骨髄にも転移していて、手の施しようがないそうだ」
父は気落ちした声を出した。

倒れる前、母は毎日面会に来てくれていた。
優しい母は、自分の体よりも僕の事を心配してくれていたのだ。
そんな母の気持ちも知らずに、あの時の僕は自分の事しか考えていなかった。
「もう…会う事ができない」
初めて、それまでの人生を悔やんだ。
もっと親孝行すればよかった。
もっと素直になればよかった。
どうして大切なものを失くしてからじゃないと、気が付かないのだろう。

いつでも優しく微笑みかけてくれた。
暖かな愛にあふれたあなたが、とても大好きでした。
「ごめん。母さん、ごめんね」

二月に入院した時、すでにガンは末期の状態で、春までもたないだろうというのが医者の診断だった。
だが、母は生きて春を越した。
もう手を握ることはできないけれど、今も僕の心の中で母は生きている。
それに、この季節を迎える度に母を近くに感じる事ができる。
窓の外には、葉桜が薫風に揺れている。
今なら、素直にこう言えると思う。
「ありがとう、母さん」